

現代假名づかい使用の實態に就いて

様式の調査用紙を作製した。

石 松 ミ ネ

一、前書き

(1) 調査の目的

この調査は昭和二十九年の三・四月に三年生が実施したものである。

昭和二十一年十一月に「国語を書きあらわす上に、従来の仮名づかいは、はなはだ複雑であつて、使用上の困難が大きい。これを現代語音にもとづいて整理することは、教育上の負担を軽くするばかりでなく、国民の生活能率をあげ、文化水準を高める上に、資するところが大きい。」との趣旨のもとに、現代仮名づかいが公布されてから約九年になる。二十二年四月に小学校に入学した子供達は、現代仮名づかいだけを習つて来たわけであるが、その子供達も中学三年になり、又一方官庁の文書や新聞・出版物・教科書等に用いられて一つの社会的な事実になつてしまつた様に思われる。然しこれに対する批判や反対もあるわけで、果してどの程度にまで一般の人々のものになつているか、一般の人々はこれに對してどんな意見を持ち、どんなに使つているかと云う事は、まだ充分明らかになされておらず、こうした点に關して或る程度實際を知りたいと云うのがこの調査の目的であつた。

(2) 調査の方法

○イ、対象は調査の便宜上、主として熊本市の一般の人とした。

ロ、アンケート式の調査を試み、現代仮名づかいに對する一般の人々の賛否の意見や、實際の使用、その他を知るため、左の

「I 賛否 1 賛成 2 反対 3 無関心

II 理由

A 賛成 1、旧仮名づかいは難しい。

2、旧仮名づかいは現代では無意味である。言葉の音が変わつて来た以上表音文字たる仮名を音通りに使用する必要はない。

3、新仮名づかいは国民の言語生活を合理化する進歩的なものである。

4、その他

B 反対 1、伝統を重んずべきである。単なる便宜主義から変改すべきでない。

2、改める事には賛成だが決定と実施の方法が非民主的である。国民の納得を経て居ないで天下り式である

3、新仮名づかいは充分整つて居ない。

4、その他

III 實際お書きになる時はどの仮名づかいを使つて居られますか。

1、新仮名づかい 2、旧仮名づかい 3、その他

IV 御意見

V 1、性別 2、年令 3、職業

ハ、対象の選定は特定の人と云うのではなく任意に當つたが、尙調

ニ、又一般家庭の主婦等の比較的仮名づかい等を意識しない場合に於ける現代仮名づかい使用の実態について調査を試みたいと思つたが実現に至らなかつた。

ホ、調査用紙は四百枚を配布したが回収出来たものは二百二十枚である。

〇へ、又官庁の文書や教科書、新聞等は現代仮名づかいであるが、他の雑誌類に於ける実態を知るため左記の雑誌について調査を行ったが充分整理に至らない。

- 綜合雑誌(中央公論、世界)
- 文芸雑誌(文学界、文芸)
- 婦人雑誌(主婦の友、婦人公論)
- 娯楽雑誌(キング、平凡、明星、宝石、読切小説)
- 中間綜合雑誌(文芸春秋)
- 中間文芸雑誌(小説新潮)

二、調査の結果とその考察

(1) 結果とその説明

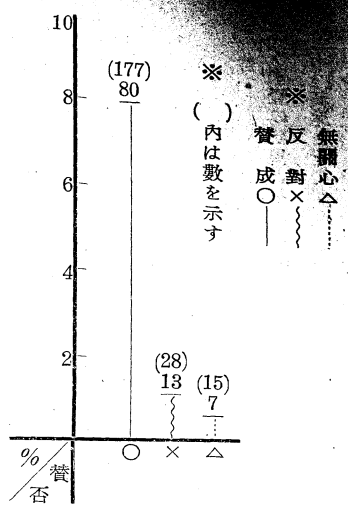
總計220

現代仮名遣使用の実態に関する調査一覽表

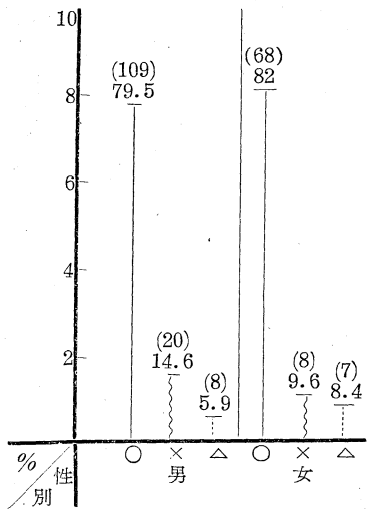
(表そのI)

賛否別	性別	年令別	職業別	意見別	實際使用別	
賛成 177 (80%)	男 109 (62%)	10(代).....2	學生.....2	①.....17	新.....90	
		20.....37	無職.....3	②.....30	舊.....7	
		30.....28	自由.....7	③.....69	混.....9	
		40.....31	會社員.....15			
		50.....7	公務員.....22			
		60.....4	教員.....60			
	女 68 (38%)	10.....17	學生.....15	①.....11	新.....55	
		20.....32	無職.....13	②.....15	舊.....6	
		30.....9	自由.....0	③.....47	混.....7	
		40.....7	會社員.....15			
		50.....3	公務員.....4			
		60.....0	教員.....21			
	反對 28 (13%)	男 29 (71%)	10.....1	學生.....1	①.....11	新.....2
			20.....9	自由.....1	②.....3	舊.....16
30.....7			會社員.....6	③.....8	混.....2	
40.....1			公務員.....7			
50.....2			教員.....5			
女 8 (29%)		10.....1	學生.....3	①.....2	新.....4	
		20.....4	自由.....1	②.....1	舊.....4	
		30.....1	無職.....2	③.....5	混.....0	
		40.....1	會社員.....1			
		50.....1	教員.....1			
無關心 15 (7%)	男 8 (53%)	20.....4	會社員.....1	①.....—	新.....0	
		30.....4	教員.....1	②.....—	新.....6	
			自由.....3	③.....—	舊.....2	
			公務員.....3			
	女 7 (47%)	20.....6	教員.....4	①.....—	舊.....3	
		50.....1	自由.....2	②.....—	混.....1	
			會社員.....1	③.....—	混.....3	

表そのⅠ 賛否による統計



表そのⅢ 性別による賛否の統計

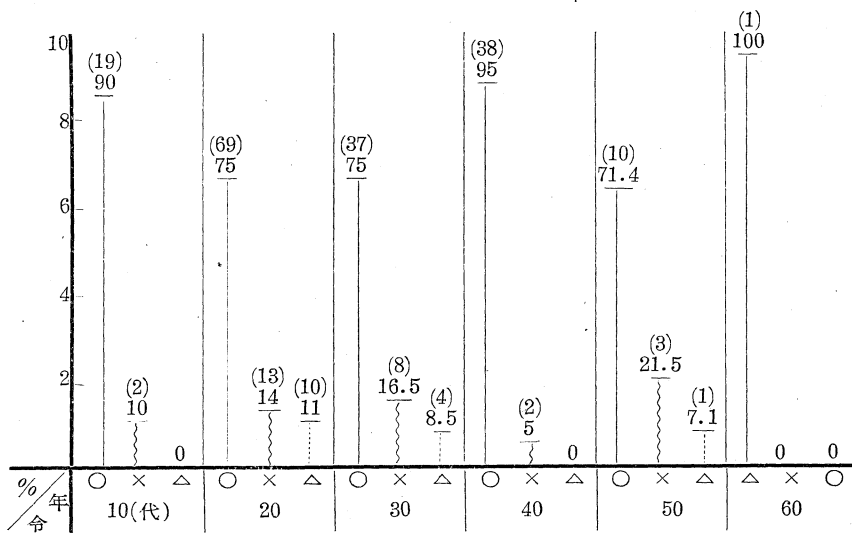


※ () 内は数を示す
 ※ 賛成 ○
 ※ 反対 ×
 ※ 無關心 △

a、男子より女子に無關心者が多い。

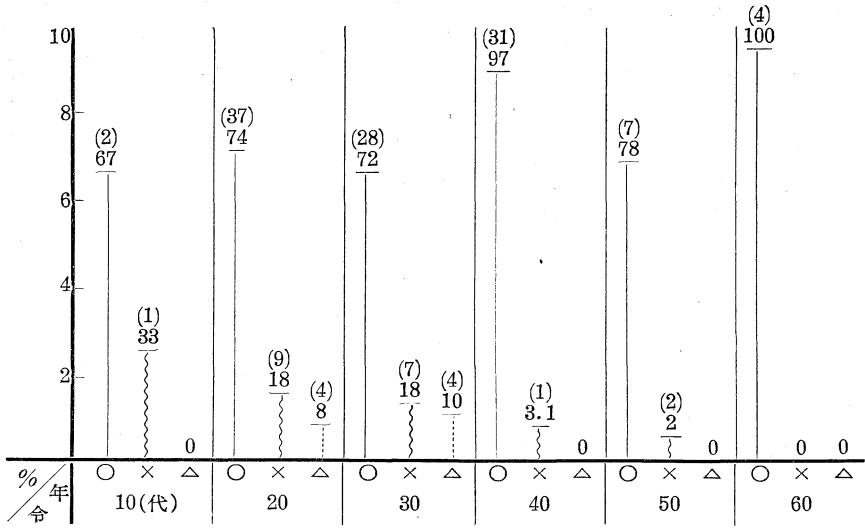
a、賛成者が多い 80%

表そのⅣ 年齢別による賛否の統計

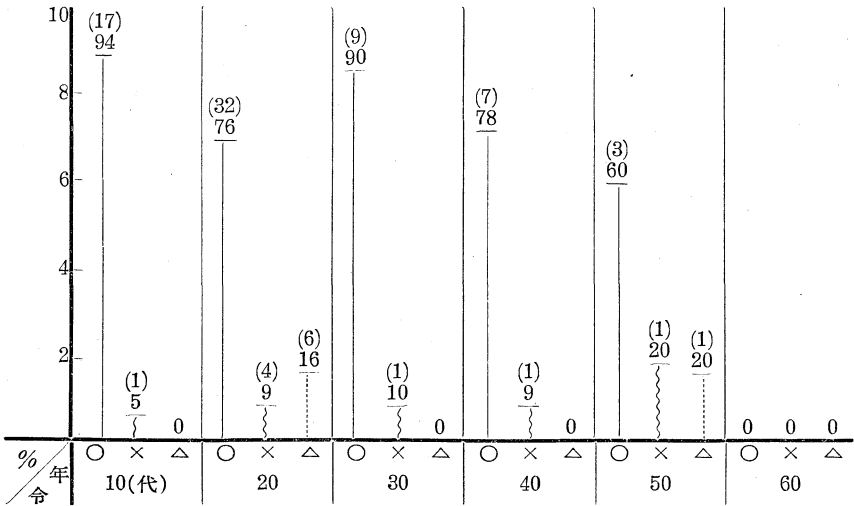


a、表、Ⅳ、Ⅴでは20代の反対者が40代より多い。
 b、どの年齢層に於ても賛成者が多い

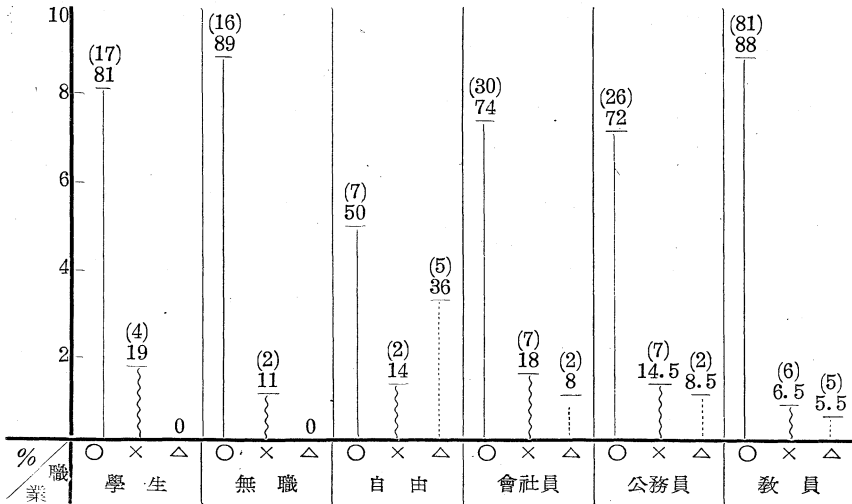
表そのV 男子の年齢別による賛否の統計



表そのVI 女の年齢別による賛否の統計

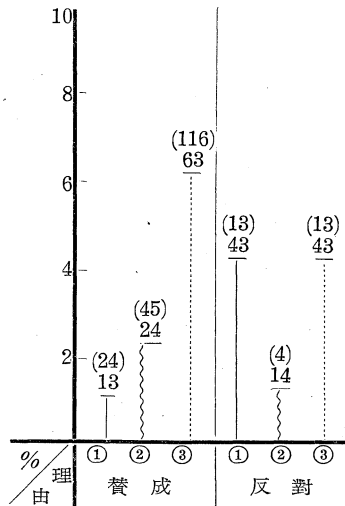


表そのⅦ 職業別による賛否の統計



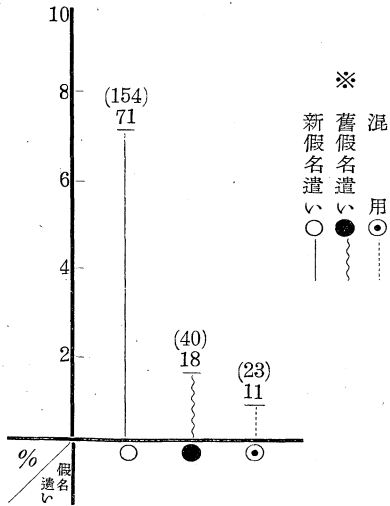
a、自由職業者に無關心者がかなりある。
 b、学生の中に反対者があ

表そのⅧ 賛否の理由による統計



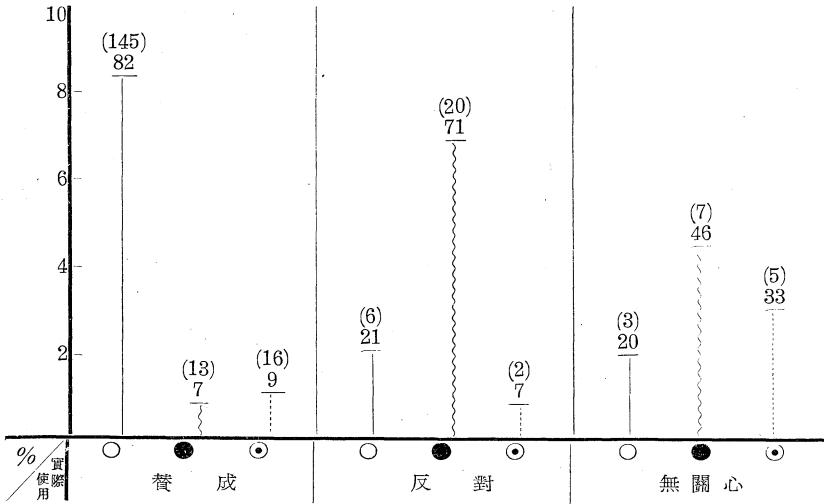
a、反対者の場
 ①理由は
 ②者が
 ③が
 b、合賛成の場
 ①合
 ②成
 ③者
 ①合
 ②成
 ③者
 ①合
 ②成
 ③者

表そのⅨ 実際使用による統計



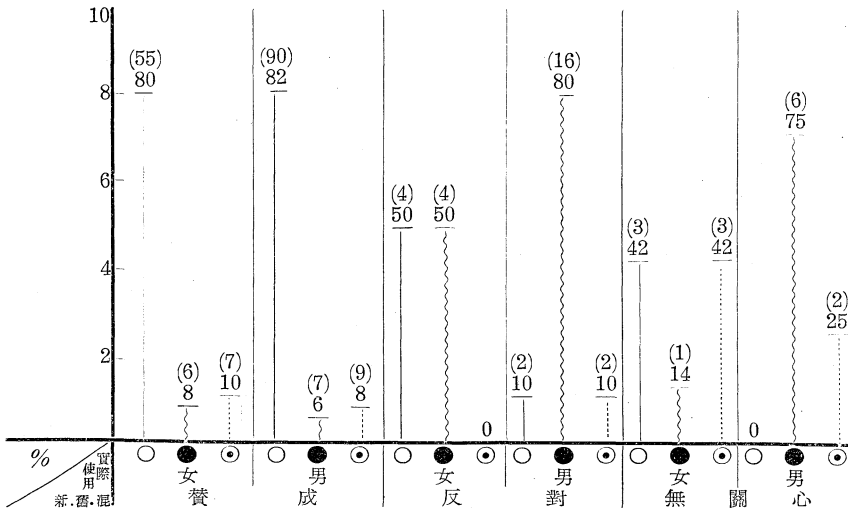
※ 混用
 舊假名遣い ●
 新假名遣い ○

表そのX 賛否別実際使用の統計



a、混用がかなりある。
 b、反対者の中で新假名づかいを使っている人もある。
 c、賛成者の中で舊假名づかいを使っている人もある。

表そのXI 賛否の性別による実際使用の統計



a、反対者と無関心の場合、実際使用の統計に男子と女子で差がある。

(2) 結果とその考察

(一) 賛成者が多いところから現代仮名づかいが或る程度社会的に既成事実或は方向として認められていると云う事が考えられる。

(二) 賛成者は③や②の理由が主である所から旧仮名づかいに対する見方が変つて来ている。③の理由と同じ事になるが調査票の意見のところにもやさしいから使うのも相当にあつた。

(三) 反対の理由として④の理由が多かつたのは現代仮名づかいが形として不充分なこと、その不充分さに對する不満の結果とも考えられる。又賛成者で旧仮名づかいを使い反対者で新仮名づかいを使う人がある事や混用があるのは過渡的な姿を示している。

(四) 無関心者のある事は現代仮名づかいの意義が徹底していないことを示しているとも云える。啓蒙の必要な事は意見の中にも見えていた。

(五) 学生に反対者が多いのは学問的に考えて現代仮名づかいに種々な無理があるからであらうか。

三、後書き

二百余枚の資料を基にして以上の様な考察を試みたが、問題として、現代仮名づかいが内容的にもつと整備されなければならぬ事や現代仮名づかいについての啓蒙の必要な事等が考えられた。

以上の実態は地域的に限られた範囲の而も僅かの資料に基いて得られたものであるが、今後こうした調査が、もつと広範囲に試みられ、より確かな実態が把握される事は言語生活改良の上に資する所が大きいであらう。

尙この調査に關しては石坂講師、本田助教授に多くの教示を頂いた。
(国文四年生)

方言に惱まされる

松 本 歌 子

教壇に立つに當つて私には一つのひそかなおそれがあつた。それは正しい標準語が使えないということであつた。処が就職をしてみても驚いたことには、いくら正しい標準語に留意して話してみても、生徒には通じない場合が多いということである。私はその原因を尋ねてみようと思つた。

私が始めて教壇に立つたのは、天草郡の島の一つである龜島(ひのしま)の中学校であつた。奉職して間もない或授業の時、紙飛行機を作つて窓からこつそり飛ばしている男の子がいるので、「そんないたずらをしてはいけませんよ」と注意した。頭をかきながら素直にやめるにはやめたけれど、何かはつきりしない顔つきである。一寸気にかゝることがあつたので、「いたずらをしてはいけません」という意味が分らない者に手をあげさせてみると、約半数もあるのには驚かされてしまつた。ではどれが分らないかと聞くと、「いけません」だとのことである。よく聞いてみると、こゝでは「いけない」意味には「いなか」といつて、「いけない」という語は、ほとんど耳にも目にもふれる機会がないことが分つた。

次に作文を見て一層驚きは大きくなつた。子供たちの作文には方言の部分が可成りあるので、今度は私に意味が分らないのである。よく調べてみると次の事実が明らかとなつた。

(一) 「だ」と発音すべきを「ら」と発音している。

例 大丈夫——らいじょうぶ

……だらう——……ららう 等